

キリスト道講演会

福音の神髄

——真の幸福への道——

2008年11月9日（東京 法曹会館）

奥田 昌道

「福音の神髄」は実に単純なもの 日本は宗教風土 人生には補強工事が要る 讚美歌「いつくしみ深き」 讚美歌「牧主わが主よ」「福音の神髄」の三部作 「山上の説教」 「敵を愛しなさい」 人間存在そのものが罪 十字架の赦し 空気のようは無条件 「祈るときには」「天に富を積みなさい」「体のももし火は目」「求めなさい」「狭い門」「私のもとに来なさい」「最も重要な掟は何ですか」「永遠の生命」「イエスは命のパン」「新しい掟」「イエスは父に至る道」「聖霊を与える約束」「イエスはまことのぶどうの木」パウロの口――マ書 祈り

「福音の神髄」は実に単純なもの

皆さま、ようこそいらっしゃいました。定刻までに皆さまがおそろいくださって、とても嬉しく

思います。20分くらい前にここで見ておきますと、席がガラガラなものですから、少し心配になりましたが、このようにたくさんお集まりくださいました。

今日の講演会は、私は本当に素晴らしいものになると確信している。だから、皆さんに来て欲しかった。このことは自分の思いから出たものではありません。私はつくづく思います。日本のクリスチャンは、あるいは教会は、キリストという方の理解を難しくすぎている。キリスト教というものを難しく考えすぎている。非常に単純で簡単なものなのに、非常に難しいもののように造りあげてしまつて、それで自分で苦しんでいるのではないかと思つています。

今日は、「福音の神髄」というたいそうな題を掲げましたけれども、福音は実に単純なものですよ、ということをお願いしたい。はつきり言つて、この場に靈なるキリストが臨在くださらなかつたら、この講演会は無意味です。この場にキリストが、見えないけれども、立つていてくださる。そして、ご自分の靈をふんだんに皆さんの中に注ごうとしておられる。

我々はいかに生活する人間です。喉が渴けば水を飲みます。

「私を飲め」

と、キリストは言われた。

「渴ける者は私のところにいらつしやい。本当にふんだんにこの生命の水をあげよう」

と。それを「要りません、要りません」と言っているのが人間ではないかと思う。人間が一番欲しいのはやはり生命、永遠の生命でしょ。もう明日死にゆく身というのは儂い（はかな）ですよ。でも、

「たとえこの身は朽ち果てても、明日はもつと凄(すこ)いところに行ける。キリストが待つておられる素晴らしい御(ご)国がある」

と。こういう希望がなかったら、生きている甲斐がないではありませんか。若い人はそう思わないかもしれない。若い人はまだまだ永遠の未来、素晴らしい輝ける未来があると思つて、皆ががんばって頂点へ向かつて行く。だんだん歳をとりますと、逆に下降線をたどることになる。「行く先はどこかの谷底か」(笑)というのが普通の人生なんです。でも、谷底が近づいてきた時に目が醒めても、もう遅いんです。もう一回頂点へ登れない。やっぱ早いときから——皆さんは保険をかけておられますか、年金は大丈夫ですか、なんていうことではないけれども——天国へ通じる保険をかけていないと困るわけです。古来、人間はみんな永遠の生命を求めてきたんです、いろんな形で。誰も人間は、「50歳で死んで、もう満足だ」という人はいないと思うんです、よほどの厭世家でない限りは。「もう地上は苦しくてしょうがないから、早く向こうへ行かしてくれ。でも、向こうってどこなの？ 地獄!? もつと困るよ!」

と。そんなところへ行くのでは困るわけです。みんな永遠の生命を求めている。だから、中国の昔話に「不老不死の薬を求めて」というような話があります。でも、不老不死といつても何百年もよれよれのガタガタの身体で生きるというのも地獄ですよ。弱った身体で生きるも地獄、早く死ぬのも地獄。これが現実ではありませんか。

私は「福音の神髄」という大それた題を掲げましたけれども、福音は誰でも無条件に直ちにすつと受けとれるものだと思う。受けとつたあと、それを持続させることが大事です。受けとつたあと、今まで下向きみであった生活が、今度は上向きのカーブに変わる。日本経済もそうなって欲しいけれども(笑)。しかし、この変化は悔い改めないとおこりません。お金ばかり追い求めていて、馬車馬のように働くだけでは無理です。もうこれは少々地獄を味わわないといけない。大丈夫ですよ、本当に神さまを信じておれば大丈夫。

キリストが生きていた時代とはどんな時代だったのか？ 金持ちばかりがいた時代ではない。裕福な時代ではありません。貧乏な人が多かったと思う。それから、病氣だつて、そう簡単に治らなかつた時代だと思ふ。あらゆる面で満ち足りていなかった。今と比べたら、実に貧困な時代です。そのときに、キリストは福音を語られた。

日本で言いますと、親鸞や法然などの僧侶により鎌倉仏教が創唱された時代にあたります。あの時代も豊かな時代ではありません。この世的な現世には望みなき時代です。少し後の時代の良寛さんなんか、やがて身売りしなければならぬ子どもたちと手鞠(てまり)をつきながら泣いていた。どうにもしてやれない。親鸞だつて、法然だつて、みな同じでした。

「けれども、この地上の現世を超えたものがあるよ」

ということをおの方々は身体によつて体得しておられたから、それで人々を癒していかれたわけですよ、心を魂を。そして、親鸞さんだつたら、

「極楽浄土がある。弥陀の本願が絶対に救うから。すぐる者は必ず救われる。南無阿彌陀仏(なむあみだぶつ)

と称^とえるだけでいい。本願を妨げるほどの悪は世の中にない」

と。そう言つて全国行脚^{あちこち}したわけですよ。実に単純ですね。法の力を唱えた日蓮さんだつてそうですよ。そのように一般の庶民・凡夫の救いを真剣に唱えた方々が、日本の鎌倉時代にはいたわけですよ。キリストはもつと早い時代にいらつしやつた。キリストはもつと以前からの歴史をうけて、あの時期に現れてくださったわけですよ。イスラエルには旧約時代の歴史があり、イスラエルの民族の中からキリストは現れた。けれども、キリストは一つのイスラエル民族に囚^{とら}われる方ではありません。まさにイスラエル民族の中から現れながら、全世界に向かつて、

「本当の救いとは何か、本当に人間が求めているものは何か」

ということをも、身体をもつて現してくださったお方です。そのお方は死につばなしではない。確かに十字架で息を引きとられた。弟子たちはがっかりしました。

「もうこれでお終^{しま}いだ、夢も希望もない。この方こそは、わがイスラエルを復興してください。さるお方だ、ダビデ王国を築き上げてくださるお方だと思つていたのに、あえなき最後をとげた。本当にあえなき無惨な最後をとげた」

と、失望落胆していたら、キリストは霊体となつて現れて来られた。

「私は生きていますよ。私の体^{からだ}に触つてごらん。脇腹に触れてごらん」

と言つて、本当に弟子たちの前に現れてくださった。そして、40日間、地上にたびたび現れて、それから父の御許^{みもと}に昇^あられた。もちろん、昇りつばなしではない。

「あなた方に聖霊という生命の霊を与える。そのために向こうへ行くのだから。だから、祈つて待つてなさい」

と。10日間祈つていたら、聖霊が降^{くだ}ってきたですよ、火のごとき聖霊が。そこから本当のキリスト教というのが始まった。そのことを現在^{いま}は忘れてしまつていようです。

キリストは何のために来てくださったか。我々凡夫を、凡人を、どうにもしようがない人間どもを救うという目的で来られた。「救う」というのは、病気を治すとか、不老長寿の生命を与えるとか、そういうレベルのものではありません。我々をキリストと同じ姿に化することが目的です。愛そのものです。そうすれば、憎しみも何も消えてしまいますよ。全世界が本当にキリストのような人物ばかりに溢れてごらんください。軍備はいらないですよ。刑務所もいらなくなります。もう実に無駄なお金が全部要らなくてすみますよ。ところが、そうしたことをやらないで、人間はしようがないものだと決めつけて、その前提の上に政治や制度もみな築きあげているわけですね。「警察官もこれだけ要ります。軍隊もこれだけ要ります。裁判官もこれだけ要ります。病院もこれだけ要ります」といろいろやっているわけですよ。病院を整備することはしようがないでしょうけれども。なにかキリストが語られたことは別世界の夢物語だというふうには、みな勝手に思い込んではいないでしょうか。

「それはさておき、我々は現実生活をきつちりやりましょう。それには政治はかくあるべきである。経済はかくあるべきである。法はかくあるべきである」

と、知恵をしぼり、知力を結集してやっているわけです。それから、自然科学の発展は凄いですね。本当に科学技術は生活を便利にし、経済発展に大きく貢献してきた。でも、所詮、学問の世界、科学の世界は地上のこの世のことです。医学も、その他の自然科学も、「人間の地上の生命をいかにして長らえさせ、病気をなくして、生きられるようにするか」ということを一生懸命にやっている。これには感謝します、本当にありがたいことです。けれども、キリストはこの世を超えたものを、別次元のものを持つてこられた。我々の住んでいる三次元の世界と異なる、見えないけれども実在する世界をはっきりと示された。この世界をどうしても想定せざるを得ないんです。見えない世界——想定の範囲外なんていう言い方がよくありますけれども——その世界を想定せざるを得ない。我々はどんなにがんばったって、神さまを見ることができません。神さまを見た人がありませんか。「私は神さまを見ました」と言っても、幽霊を見たのかもしれない。誰も確信をもって、「見ました」なんて言えない。神さまはともあるらしいけれども、誰も見た者はいない。

「神を信じろと言われたって、そんな見たこともない、さわったこともないものを信じろ」というのは無理ですよ」

と。そうでしょ、当たり前のお話です。ところが、その我々が見たこともない、つかむこともできない、信ずることもできない、そういう神さまを具体的に表してくれた方がイエス・キリストなんです。これは凄いことと思いませんか、皆さん。イエス・キリストは凄いなと思われませんか。これは本当に驚きの世界なんです。今日、讚美しました二つの讚美歌(312番「いつくしみふかき」、354番「かいぬ

しわがまよ)。私は、これは素晴らしい讚美歌だと思います。歌っていると涙が出てきます。イエス・キリストは讚美歌の歌詞のとおりのお方なんです。決して、死につばなしではない。今もありません。この場に、見えないけれども、ご臨在くださって、

「そうだよ、そうだよ。私はこんな人間——あるいは霊、靈的人格——こういう者だよ」

と言っておられる。でないと、こんな歌を歌っても何もなりません——「何もならない」と言ったらちよつと言い過ぎですけども——本当にこれは現実感のあることなんです。

キリスト思想家のヒルティは非常に敬虔な信仰深い人でしたから、

「神さまに直結しろ。神の御意ごいにかなうような生活をしろ。神と共にあることが幸せへの道だ。神のみそば近くにあつて、神の望みたもう御意にかなう有益な仕事を生涯やりぬく。

そして、人格的に神さまのような、

彼は「キリストのような」と言いますけれども、

そういう人格に自己形成していくことが人生の意義だ、目的だ。ところが、教会はそういうことをやってくれない」

と言つて、当時の教会に対する非常に強い批判をした。批判というか愛ですね。本当の教会はこうであつてほしいという願いをこめながら、現実の教会では、特定の信条——「使徒信条」とか、そういういた教義——を信奉して、教会に集う人々がちつとも変わらない。教会という団体に属していることで安住している。社交の場になつていく。

「教会の礼拝に参加して、教会から出て行くときに別人のようになって輝いて出てこなければ、その礼拝は偽りだ。だから、教会とか伝統的なキリスト教というものではなくて、各人が神さまに直結しろ」

と言う。そして、彼はキリストをモデル、模範にした。キリストは、ヒルティにとってはどこまでも模範なんです。そして、一種の自己修養と申しましょうか、それによって

「キリストのような霊的人格に自己形成していく、これが人生の目的だ」

というふうに言います。もちろんヒルティはひとりでにそれができるとは言っていない。

「神の霊の助けが要る」

と言う。これは聖霊のことです。ただ、ヒルティは、

「その聖霊はどうやって我々に宿ってくださるのか、そのプロセスはわからない。けれども、人生の中で必ずそれを体験しないことには、神さまのことはわからない。聖書のこととはわからない。聖書が聖霊と名づけるこの不思議な霊、これを宿さないことには、キリスト教もわからない。聖書もわからない。生き生きとした信仰も出てこない」

と言うんです。「喜びの霊に導かれた喜びの生涯」と彼は言う。だから、そういうヒルティが歩いている喜びの生涯は、私たちにとっても、とても望ましい素晴らしいものなんですけれども、そのプロセスはわからない。彼はキリストをモデルにしています。模範なんです。

「素晴らしいお方だ、比類なき人格である」

と言っています。そして、『キリストに倣いて』というトマス・ア・ケンピス〔中世のキリスト教的神思想家〕の文章がありますけれども、それを彼は非常によく引用します。

日本の宗教風土

私ども日本人はどうでしょうか。日本人の我々から見れば、教会に対する批判はヨーロッパのキリスト教の現実に対するヒルティの愛の筭むちなんですね。「かくあつて欲しい」という願いでやっています。そうした精神土壌の中で彼は百年前にあのように叫んでいる。

我々日本人はどうでしょうか。日本は法然、親鸞といった素晴らしい宗教者が既にいたわけです。もちろん、キリストがいた時代から千年後ですけれども。しかも、日本には古来から神道があり、その後、仏教が入ってきた。その仏教がさらに練られて、1200年代に鎌倉仏教が創唱され、非常に洗練された日本的な姿をとった。そのあとで儒教、朱子学、陽明学などが入って来ています。それらによって我々日本人の精神土壌が耕されている。決して日本人は、

「自分たちは非宗教的民族だ、宗教性がない」

とか、そんなことを嘆く必要はない。私はそう言いたい。しかし、だからといって、

「日本に入ってきたもの、それによって本当の永遠の生命、死んでも死なない生命が私の中に来ています」

と、一人ひとりが断言できるか。ここに問題があると思っています。現実感のあることでなければ、

思われた観念的な世界ではだめですから。描いたものを見て、「ああ、好いな、このピフテキはうまそうだな」なんて言ったって、描かれているものではない。これを「絵に書いた餅」と申しますよ。食べられるものでなければいけない。

私がなぜ、日本人の宗教性を肯定するかといいますと、やはり、日本は自然風土が素晴らしいからです。まずは富士山、我々日本人は崇高な山という観念を持っています。素晴らしい富士山の崇高性というものを私は感じます、特に雪をいただいた富士山などは。だから、古来、神の住む山、崇高なる富士山という思いを日本人は持ち続けてきたと思います。それから、海ですね。

「海には海の神様がいます」

と信じてきました。だから、海が荒れたならば、犠牲を献げる。人身御供まで献げた。竜神を鎮めるために。そんな犠牲というものを私たちは望まないけれども、そういうことまでやった。山には山の神様があり、海には海の神様があり、家庭に帰れば、家の神様もいらっしやる(笑)。だから、

「自然の中に神が宿っておられる」

という、非常に素朴な宗教性というものを持つているわけです。伊勢神宮だつて実に清らかな感じがありました。菅原道真は学問の神様として祀られる。八幡太郎義家は八幡様ですか、いろいろ日本の歴史上の偉人もまた神として祀られたりしている。つまり、

「人間を超えたものが在る」

ということは何信じているわけです。それから日本のご家庭にはご仏壇があるでしょ。ご仏壇に、皆

さん礼拝なさつて、そして何かといえご仏壇にご報告をしたりする。つまり、祖先というもの——祖先と言つたつて何代も前の遠い祖先ではない——親父さん、あるいはお祖父さんお祖母さん、そういった近い先祖の霊が自分たちを守り導いてくれているという信仰があるんですね、素朴ながら。お盆になったら帰つてくる。お盆が終つたら、またお送りする。だから、日本人は決して、「死んだらお終い」なんて思つていないんですよ。「向こうの世界が在る」と思っている。しかし、

「その向こうの世界というのはどんなものかというのはよくわからない。しかし、何かありそうだ」

と。そういう感じ方をする日本人の宗教性というものは豊かなんです。ところが、神様とは何かをつきつめて思つたり考えたりしていません。最後のところまで突き詰めていません。それに対して決定打を示してくださいだったので、私はイエス・キリストだと思つていんです。私も日本の宗教風土の中で育つてきました。崇高なるものに対する憧れもありました。

「自分が罪に汚れた人間だったら、決して神の祝福を受けるに値しない。神社にお参りする時でも汚れた人間はお参りするに値しない」

と、そう信じていました。でも、本当の意味で「永遠の生命」を約束し、無条件に与えてくださる、そういう方を知らなかった。先程、いろんな神社仏閣のお話をしましたが、日本でお参りするのには、守つてほしいからなんです。受験にさしかかれば、合格祈願をする。私は法科大学院の教授をやつてきました。法科大学院の一人前の学生だつて、やっぱり、そういう時にはお守りを持つてますよ。

何かにすがっています。誰もそれは笑えない。何かにすがりたいんです、守ってくれるものに。それは人間の本性だと思います。

人生には補強工事が要る(ヒルティ)

今日、皆さんのお手許に、こういう小冊子『幸福への道』カール・ヒルティ「幸福論(第三部)から。NHKラジオ深夜便「こころの時代」2008年4月18日放送」を差し上げてあります。この中でヒルティは、「二種類の幸福」ということを述べ、ある中世の著述家の言葉を引用して、

「人生には補強工事が要る」

ということを言います。その「補強工事」というのは何か。

「自分自身の中にそれを求めても無駄だ。自分の中から出てくるもので足りるなら、わざわざ補強工事をする必要もない。自分を越えた何ものか。外側から流れ込んできて、そして自分たちを支え導き、守ってくれる。いついかなる時でも無条件に、直ちに、どんな境遇にあっても、さっと現れてくるような、そういう補強工事が必要だ」

と、ヒルティは言っている。皆さん、お手許にお持ちでしょうから、その9頁のところですよ。

「最近歿したばかりの或るドイツの著述家がのべた「人生は補強工事を必要とする」という言葉が、きわめて正しいものとなる。ただ彼はその補強を間違った場所に、すなわち、人間生活そのもののなかに求めている。だが、そこにはいずれにしても、そのような補強

力はずねに見出されるわけではなく、老年や病氣、孤独や困窮に際してそういう力は与えられず、それどころか、そのような逆境が相携えておしよせることもしばしばあって、そうした場合には、元来もつとも強い精神でさえすつかり屈服させられることもある。われわれは、あらゆる困難に対して常にこたたりなく用意されているある助力を必要とするのである。われわれは自分の幸福を、いつでも得られ、まただれもが得られるものの上に、築かなければならない」

と。このような理解は素晴らしいですよ。「いつでも得られ、誰でもが得られる」という。無条件ということですよ。

「ごちらの善、不善にかかわりなく、無条件に直ちに与えられる。そういう補強工事が必要だ。われわれが必要とするのは、自分のなかから出てくる力ではない。自分の力でこと足りるのなら、力の不足をさほど痛感しないであろう。

では、何が本当の補強工事かということを次に言います、

人生のまことの補強工事とは、神のそば近くあることと仕事である。その結果自然に生ずるものは、あらゆる被造物に対する愛である。ただしこれは、最初から無造作に得られるわけにはいかないが。

今言った、「神のそば近くある」ということと「有益な仕事」、神の導きの中で行う有益な仕事。天職ですね。

これ以外のものはすべて、人間の心を完全に満足せしめるには、あまりにも卑小である」

こういうことを言っている。では、我々にとって補強工事というのはどこにあるのか。先程述べた神社仏閣、ご仏壇、そういうものであるのだろうか。私はそれ以上のものであると思います。そういった今までいろいろ述べましたものは多少の補強工事にはなるけれども、決定的なものではない。決定的なものがひとつ現れた。それはどこに現れたか。イエス・キリストという人格において現れた。しかも、このイエス・キリストという人格は——ユダヤ民族の救い主がベツレヘムにお生まれになった——ユダヤ民族の救い主でもありますけれども、ユダヤ民族は、彼を救い主とは信じていない。むしろ、全世界の人々の救い主であり給うお方です。東西も南北もない、民族の違いなんて問題ではない。およそ人が人であるかぎり、人は本来、神の似姿、神の本質を宿すものとして存在している。その本来の本当の人らしい人に回復するためにキリストは現れてくれた。キリストは自分のことを何と言っておられるか。そして、神さまのことを何と言っておられるか。

「父よー」

と呼ばれた。

「父よ、あなたの御意を！」

と。それから、ヨハネ伝では、神さまのことを、

「私をお遣わしになったお方」

と言っています。派遣社員なんです、キリストは(笑)。本当に派遣されてやって来た。遣わされてや

って来た者は、遣わし給うた方の御意だけを求めて生きる。徹底的に。ここが凄いです。自分のことを思っていない。

「あなたの御意は何ですか。あなたは何を私においてお望みですか？」

と。父と共に居たら幸せだったんです、キリストの霊は。本当に幸せだった霊なるキリストが人の姿をとって現れた。マリアさんの中に宿ったということになっていますが。キリストは人でありながら、もともと神の御許に居た霊でしょ。それが地上に肉体もって現れたんですから、始めから両方の性格を持っています。神さまを慕わざるをえない。自分の故里は天なんですから。

しかも、慕う時には「父よ」と呼び、「父と子」という関係です。それから、使命的存在としては、派遣社員という使命においては「主よ」と呼ぶ。神は主で、自分は僕なんです。僕は主の意だけを大事にする。主の意のとおりに生きる。武士道の精神はそういうところがあります。「忠臣蔵」の精神にはそういうところがあります。主の意だけを意として生きる。それに自分を献げきっていく。

こうしたことは普通、我々にはできない。一時的にはできるかもしれない。けれども、生涯を貫いて行くことは、私にはできない。ヒルティは一生懸命にそれをやった。あの人は立派な方です、本当に立派な方ですよ。

「努力しろ！ 己の意志を開け渡せ！ そしたら、ひとりであとはうまくいく。聖霊が助けてくれる」

と言うんです。私はそんな優等生ではないので、

「いやあ、そんなの簡単にいきませんわ」
 と。でも、キリストはありがたい方です。神さまと我々人間どもの真ん中に立つ仲保者ちゆうほくしやです。つまり仲立ちをする人です。片一方では、神さまの御意みごころを100%受けて、私たち人間に向かってはそれを流してくれる。

その御意が仲保者の媒介なしにエホバの神さまから人間に直ちに來たら、これは恐ろしい旧約の審判の世界になってしまうでしょう。人間は出来が悪いから、誰も神の前に立てないんです、恐ろしくて、穢けがれている人間は。神の姿は、見てはいかん。後ろ姿しか見てはいかんです、モーセの時から。ところが、キリストという方は神さまと我々の間に立って、神の光、愛、生命を100%受けて、それを我々に惜しみなく流してくださった。トランスレーター(変圧器)の役目をしてくれた。1万ボルトの高圧電流がキリストによって普通の100ボルトのやさしい電流に変えられ、我々の生活に役立つてくれる。まあ例えていえば、そういうお方ですよ。我々が直接、「父よ」とか「神よ」とか、呼べと言ったって、呼べない。神のことがよくわからないからです。それをキリストは、

「私を見た者は父を見たんだ。私の中に父がいらっしやるんだよ。三年間も一緒にいたのに、まだわからないの？ 私を見た者は父を見たのだ。私と父とは一つだ」

と、ピリポにでしたか、言われた。だから、人間としての姿をとっておられるイエスというお方の中に、神を見た人は幸いなんです。それがなかなか見えない。それでみんな躓つまずいたんです。

讚美歌「いつくしみ深き」

今日歌っていただきました讚美歌を少し辿たどってみたい。まず、讚美歌312番「いつくしみ深き」から行きましょう。

- 1 いつくしみ深き友なるイエスは、罪とが憂うれいをとり去りたもう。
- 2 此ころの嘆きを包まず述べて、などかは下ろさぬ、負える重荷を。
 悩みかなしみに沈めるときも、祈りにこたえて慰めたもう。
- 3 いつくしみ深き友なるイエスは、かわらぬ愛もて導きたもう。
 世の友われらを棄て去るときも、祈りにこたえて勞あつちりたもう。

「いつくしみ深き友なるイエスは」という。ところが、ヒルティにとつては、キリストは「友」ではなかったのです。いうならば、模範生、兄貴なんです。尊敬すべき兄貴なんですよ、ヒルティにとつては。だから、

「兄貴のごとく弟もなれ」

という感じなんです。また、彼はそうなったと思います。だから、あのようになにこにして、祝福に満ちて、我々に語りかけている。けれども、私にとつてはやつぱり、イエス・キリストは「いつくしみ深き友なるイエス」なんです。皆さんにとつても、そうだと思います。「友なるイエス」です。

「罪とが憂いをとり去りたもう」

我々と神さまとの間を妨げているのは、この「罪・咎・憂い」です。これのない人はないはずですよ。お釈迦様は悟りを通して、罪・咎・憂いを脱却されたと言われていますけれども、我々凡人はそうはいかない。坐禅を組んだら、罪・咎・憂いが本当に消えるか、それは私にはわからない。でも、キリストは実際に、罪・咎・憂いを自分の身体に背負ってくれた。それが十字架にかかってくれたことです。全部、引き受けてくれた。

「引き受けたから、大丈夫だよ！」

と、我々に向かつて仰ってください。ヒルティは、なぜキリストをそのように受けとらなかつたかと言いますと、当時の人々があまりにも安直に十字架を受けとった。どの教会にも十字架があります。

「あつ、これでみな赦されている。これで大丈夫なんだ。教会に属していれば、それでいい。」

礼拝に20分か30分行けば、もうそれでいいんだ」

と、こういうふうにあまりにも安直にキリストの救いというものを習慣化して受けとった。それに対するプロテスト（抗議）なんです、

「もう一度、原点に帰れ」

と。それに対して、私どもはそうではない。ヒルティはヒルティ。我々はどうかというところ、やはりこの「罪とが憂いをとり去りたもう」ということが絶対に必要です。伊勢神宮にお参りするのに、五十鈴川で水をかぶろうが、清めようが、清まるわけではないと思います。塩をふりまいたからといって、清まるわけではない。あれはシンボル（象徴）ではありませんけれども、本当に我々自身が根

底から清まるかというところ、清まらないと思います。

キリストが全部引き受けてくれた。十字架にかかり全部引き受けてくれた。

「あなたは清い。私が全部、あなたの穢れを吸い取ったから。そして、私の中の清らかなもの、生命を全部やるよ」

と。交換輸血をしてくださった。本当にそうです。それが愛です。十字架において現れた神の愛というものは、そういうことなんです。

「このころの嘆きを包まず述べて」

我々は自分の中なる思いを訴えるお方、語り告げるお方、そういう方が欲しいですよ。

「などかは下ろさぬ、負える重荷を」

どうして下ろさないの？ 自分で重荷を背負ってはかりいなくてと。

「いつくしみ深き友なるイエスは、われらの弱きを知りて憐れむ。」

我らは弱い。「いや、私は強い。そんな助けは要らん」という方は、まあしばらくそのやり方でやってください（笑）。やはり人間は自分の弱さを認めて降参しないと、どうにもなりませんから。私は決してその人たちに、「今すぐに自分の弱さを認めろ」なんて言いません。

「悩みななしみに沈めるときも、祈りにこたえて慰めたもう。」

いつくしみ深き友なるイエスは、かわらぬ愛もて導きたもう。

世の友われらを棄て去るときも、祈りにこたえて労りたもう。」

という。

讚美歌「牧主わが主よ」

それから、その次の讚美歌354番「牧主わが主よ」。

- 1 牧主わが主よ、まよう我らを若草の野べに導きたまえ。
われらを守りて養いたまえ。我らは主のもの、主に贖あがなわる。
- 2 良き友となりて常にみちびき、まよわば尋ねてひき返りませ。
われらの祈りを受入れたまえ、我らは主のもの、ただ主に頼る。
- 3 赦しのみちかい、救いのめぐみ、きよむる力は皆主にぞある。
我らをあがない生命をたまう、我らは主のもの、主に在りて生く。
- 4 御慈愛みいつしみをば我らに満たし、今よりみむねをなきしめ給え。
我らをあわれむみ恵みふかし、我らは主のもの、主のみ愛す。

「牧主わが主よ、まよう我らを」と。キリストは牧者なんです。我々を導いてくださる牧者です。ヨハネ伝10章に出でますが、牧者キリストなんです。我々には迷いがあります。そういう迷う我らを導いてくださる導き主です。

「若草の野べに導きたまえ。われらを守りて養いたまえ。我らは主のもの、主に贖あがなわる」

「主に贖あがなわる」は「既に主に贖あがなわれたり」と読んでほしい。これから贖あがなわれるのではない。「主のもの

というのは、

「もうあなたを贖あがなったから、あなたは私のものだよ」

と。「きれいになってから来い」とは仰らない。

「私がいかにしたから、おいでよ。もう抱いているんだよ」

と。「きれいになってから来い」と言われたら、行けないですよ。「仲直りしてから来い」と言われたら、仲直りできないですよ、人間同志は。

「私の所に来い。あなたのその敵意、憎しみを全部私が片付けたから。私という質を、私の霊を受けとってごらん。これは愛の霊だから。敵のために祈る霊だから、その霊があなたにくっついていたら、そのようになるよ」

と。これが福音なんです。

「良き友となりて常にみちびき、まよわば尋ねてひき返りませ。

われらの祈りを受入れたまえ、我らは主のもの、ただ主に頼る」
ただあなたにだけ自分を委ねてまいりますと。

「赦しのみちかい、救いのめぐみ、きよむる力は皆主にぞある。

我らをあがない生命をたまう、我らは主のもの、主に在りて生く」

「生命をたまう」ではなくて、「生命をたまえり」と、もう既に生命をたまえりという気持ちで歌うことです。主に在りて今、生きていきますと。

「御慈愛をば我らに満たし、今よりみむねをなごしめ給え。」

この「御慈愛」の実体は何かというところ、聖霊なんです。助け主、聖霊。これは後で申しますが、「慈愛」の実体は聖霊です。ヒルティは「神の霊」と言ってます。それを私たちに満たしてくれる。これがあるからこそ、聖旨を行っていくことができる。聖旨を果していくのは、この聖霊というお方の導き、助け、ご助力によってやっていくことができます。

「我らをあわれむみ恵みふかし、我らは主のもの、主のみ愛す。」
当然ではないですかと、歌詞は言っています。

「あなたを愛さないではいられないではないですか」

ということ。ヒルティは、「神を愛せよ」と言うんですよ。私は

「愛せません。神さまはわかりませんから」

と言う。神さまが愛してくださいっている。

「神はキリストにおいて私たちを抱いてくださっている。それに気付いたら、キリストを

慕わざるをえない。キリストを愛さざるをえません」

と。全部、私にとっては、順序が逆なんです。ヒルティさん、すみませんね。そういうことなんです。

「福音の神髄」の三部作

お配りしたプリントの言葉を味わっていきたいと思います。これは三部作と言っていいと思います

す。「福音の神髄」というタイトルにしました。皆さんにどうのご馳走を提供すればいいのかと思つたところ、自ずとこのタイトルが出てきました。この三部作というのは、どういう構成になつているかといいますと、第一部はマタイが中心です。しかも、キリストの御言葉が中心です。キリストの行為の面は取り上げていません、今回は。マタイの福音書をずつと取り上げてまして、マルコの福音書が一所だけ出てきます。マルコ福音書12章です。ここまでがマタイ伝中心の第一部です。

次は、ヨハネによる福音書が出てきます。これが第二部。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書があるけれども、マタイ・マルコ・ルカは「共観福音書」といいます。キリストの言葉とキリストの行為を同じような視角から、人間としてのイエスを——もちろん一方で神の子イエスなんですけれども——人間としてのイエスを見ている。同じような角度から見ているのが、マタイ・マルコ・ルカの三つの福音書です。共に観るといっているので「共観福音書」という。それに対してヨハネ福音書はちよつと違います。この福音書はキリストの行いを、いわば手段にすぎないと言いますか、話を展開させるひとつの道具として扱っていると言つてもいいくらいで、中心は「永遠の生命」を語っている。永遠の御国そのものの姿を我々に語り告げている。つまり、我々のハートに、霊に語りかけている。霊の福音書と言つてもいい。マタイ・マルコ・ルカは、キリストの言葉や行為を扱っている福音書ですけれども、ヨハネの福音書は霊の次元の深い福音書というふうに見ていると思う。それで、ヨハネの福音書からかなりたくさん聖句を集めてきました。これを全部、読んでいきます。それから、第三部は、交響曲でいえば、第一楽章、第二楽章に続く第三楽章という感じになるけ

れども。第三部は「ローマ信徒への手紙」から始まります。パウロの言葉を集めました。やや神学的な角度からの話になります。罪とは何ぞや。救いとは何ぞや。そういったスケールの大きいパウロの福音把握がテーマです。この三つをこれから見ていこうと思います。

「神とは何ぞや、キリストとはどういう方か。永遠の生命とは何ぞや。死んだあとはどうなるのか。何が神に喜ばれるのか?」

なんていうことを頭でいろいろ考えるよりも、直にキリストの言葉に触れること。これが大事です。キリストの言葉を聞く時に、あなたご自身に今、ここにいらっしやるキリストが直接語りかけておられるという角度で受けとってください。そうすると、

「本当にこれは生命の言葉だ」

ということがよくわかります。キリストがこの言葉を通して我々に語りかけていらっしやる。これは何千年たつても関係ない。永遠なんです。永遠というのは時を超えています。我々は時間の観念の中で物事を考えますけれども、神さまの世界は絶えず現在です。向こうから迫ってくるのも現在に迫ってくる。過去が迫ってくるのも現在に對してです。常に現在、永遠の現在なんです。キリストの霊的人格というのは今もここに生きていてくださる。そして、永遠の現在として我々を生かしてください。キリストの言葉とはそういう言葉です。

「山上の説教」

まず、マタイの5章から、

「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄

つて来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

^{あらさが}粗探しをする人は、「口を開かないでは教えられないじゃないか」なんて言う(笑)。「口を開き」というのは、よほど大事なことをこれから語るよ」という意味です。「幸い」という見出しがついています。ここで

「幸いである、幸いである」

と八つほどの祝福が並んでいるわけです、3節から10節まで。どういう人たちが「幸いだ」と言われているかということによく気をつけてほしい。決してこの世の地上的な意味で幸福な生活を送っている人、生活の諸条件に恵まれている人は対象にはなっていない。

3. 「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

「心が貧しい」というのは、

「神さまの前に自分の心はからっぽです」

ということなんですよ。「あいつはさみしい人間やなあ。心がきたなく卑しい人やなあ」とか、そんな意味ではない。心がからっぽ、心が神さまの前からっぽになっただけのことです。

「あなたの前に誇るべきものは何もありません。私はあなたの前には本当にからっぽの存

在、飢え渴いたからつぼの存在です。どうぞあなたが入って来てください」

と、そういうふうからつぼなんです。あるいは別の言葉で言えば、神さまの前に平伏ひれふしていることです。似たような言葉に「謙遜けんそん」という言葉がありますね。キリストは、

「私は柔和で謙遜な者だから」

と書いておられる。あの謙遜けんそんというの、神の前の謙へりくだり、別な言葉でいえば、神さまの前に自分をサムシング（何ものか）にしていないということ。神さまの前では、社会的地位なんていうものは全然、問題にならない。申し訳ないけれども、この中にはいろんな立派な方がいらっしやいますけれども——社会ではそれを肩書かたがきと言います——肩書の前に頭を下げてくれるのであって、その人に頭を下げていないですから、ご心配なく（笑）。肩書や地位を外れたら、もう誰も見向きもしません。神さまの前には肩書なんて問題にならない。その人の霊が本当からつぼであるか、自己主張をしないか。「私はこんな立派な者です、だから認めてくださいね」と、そうじゃないんです。

「私はあなたの前では全く何ものでもありません。あなただけが抛より所です」と言っている、そういう心のすがた。これが「幸いだ」ということです。

「なぜなら、神さまが100%に入ってくるからね。私がその例だよ。私の姿はそうだよ。あなたの方がそういう姿になったら、幸いなんだよ」

と、キリストは言っておられます。

⁴ 悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

「私が慰めてあげるよ。悲しんでいる人は幸いである。なんとすれば、私が本当の悲しみを取り除き、慰めてあげるからね」

という、この言葉があるんです。だから、キリストは、

「笑っている人は災いだ」

と、別な福音書に書かれている。キリストを必要としないから。

「人からの慰めではなくて、本当に神さまからの慰めが欲しい人、その人は幸いなんだよ。私という天国体、これがあなたの慰めとなる。そしたら、逆転するからね」

と。つまり、天の次元から切り込んできて、天の次元から天の宝を引ひき上げて、キリストは語りかけてくださっている。だから、その天の宝を受けとれる人はどういう魂の姿の人か。これは自分も何ものにもしていない。あるいは、非常に打ちひしがれて悲しんでいる人。この世の中には悲しいことがいっぱいありますよ。本当に悲しいですよ。しかし、

「その人は私から本当の慰めを受けとる。私と一つになれば永遠だよ。子供さんを亡くして悲しんでいる人。子供さんは今、天国で癒いされていますよ。天国で輝きらきますよ。すぐにそれを見るることができますよ」

と。向こうの世界からこちらを抱きとって抱きしめてくれているのがキリストなんです。

「天にのぼった者は誰もいない。天からくだってきた者だけが、天のことを語る」

と、キリストはヨハネ伝の中で言っておられる。だから、「天国」と言われているその霊界、輝く世

界、その消息をキリストは100%持つて来てくださった。それを受けとったら、キリストと一つになったら、質的には我々は地上人でありながら天国人なんです。地上の人でありながら、既に天国の質をいただいたて、天国の質がだんだん輝いてくる。老年になりますといよいよそうなります。この身体がぼろっと剥けますように肉体が亡びますと、サーッと向こうの世界へ行く。連続性しているんですよ。

そのことをヒルティは「永遠の生命」と言っています。1908年に『幸福論』のあとに書いた論文が『永遠の生命』です。その論文はヒルティの集大成と言ってもいい。それから、1909年に書いたのが『力の秘密』です。それは神の愛について書かれています。これが人の中にしみ込むこと。これが最後のテーマとなりました。

「アモール オムニア ヴェインキット」(AMOR OMNIA VINCTI)

「愛は一切に勝つ」

それを書いてすぐ向こうへ逝きました。でも、それを、皆さん、手にできなくても大丈夫です。『幸福論』の中に、ほとんどエッセンスが出てますから。また、それを集大成したのが、『永遠の生命』と『力の秘密』ですから。このようなヒルティが書き明かそうとした向こうの世界の消息を身をもって現してくださったのがキリストです。〔註…『永遠の生命』と『力の秘密』の邦訳は、小池辰雄著作集第5巻『百世のヒルティ』(1977/8刊)に収録〕

『柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。』

キリストは柔和な人ですよ。

『義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。』

「義に飢え渴く人」、この義は神の義のことです。この世は不義が充満しています。それに対して本当の義を求める人は幸いだ。それから、

『憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。』

『心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。』

みんなこれはキリストの姿なんです。我々がキリストの霊を受けますと、こういう姿に変えられていく。聖霊という方は我々を形造ってくださるんです、キリストと同じ姿に。ヒルティさんみたいに頑張らなくても、ちゃんと一人ひとりにやってくださる。だから、私の道は易行道、即ち易しい道です。修行の道ではない。先にキリストから頂いているんです。もらった慈しみの霊、聖霊、これが私をきちんとヒルティの望む姿に変えてくださる。ヒルティは一生懸命、自助努力で走ってくれた、マラソン42キロをね。そしてゴールした。ゴールしてみたら、

「あれっ、奥田がおるではないか。どうしたの!？」

「聖霊が運んでくれたんです」

「しまった!」

とヒルティは言うかもしれない(笑)。でも本当にそうなんですよ。

『平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。』

⁴⁰義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」(マタイ5:1-10)

平和を実現する人々、義のために迫害される人々もそうです。

「敵を愛しなさい」

それから、「敵を愛しなさい」という言葉が出てきます。

⁴³「あなたがたも聞いている通り、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。⁴⁴しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

こんなことはキリストしかできないです、「敵を愛する」なんてことは。それから、素晴らしいのは、キリストは神さまのことをどんなふうにつまえておられるか。恐い神さまとは見てない。キリストは、

⁴⁵……父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてください。

と。これをパリサイ人は嫌った。正しい者は天国に、罪びとは地獄に行く。そのために我々は努力している。それをイエスは宝もゴミも一緒くたにして天国へ連れていくと言う。

「入学試験撤廃なんてのはだめだ。厳しい試験をしろ。受験競争の世の中だよ」と言っているのがパリサイ人。それに対してキリストは親鸞と一緒にしょ。

「善人なおもて往生する。悪人においてをや」

と。善人は自分の善に依り頼んでいる。悪人は依り頼むものがないから、弥陀の本願にひたすら縋る。だから、「悪人正機だ」と言った。自分を善人と自覚したり、自分は義だと自覚するのは、キリストからは、「ノー！ その人たちには用がない」と仰います。それに対して、

「私には救いがありません。何とかしてください！」

といつて、キリストのところへ縋ってくる者、それを無条件で受け入れる。無条件で受け入れると、優等生は怒るんですよ。「落第生と優等生を一緒にするな！」と言って怒るんですけれども、自分を落第生と自覚する人は幸いなんです。ルターもそうだった。ルターはカトリックで模範的な修道僧だと言われた。けれども、ルターの内面はもう戦々恐々、

「神は審判の神、恐ろしい神だ。私はこの義の神の前に立てない」

と言って、苦しんだ。その時にキリストの救いに縋る他ないという境地に来た。それで、

「信仰のみ」

と言った。その「信仰のみ」というのも、命懸けでキリストの救いに縋るといって、「信仰のみ」であって、安直なものでは絶対ありません。

⁴⁶自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。

誰だってそんなことはするではないかと。「徴税人」とか「異邦人」というのは、当時の宗教家が蔑んでいた人たちです。そういう人たちのことを思いながら、

「神さまの御思いはそんなのではないよ」と言う。

⁴⁷ 自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、同じことをしてはいないか。

我々もよくやりがちです。自分の友達や好きな人に、にこにこにこにこと近づく。そうでない人には、フンと遠ざかる(笑)。そうであってはいけないということ。

⁴⁸ だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ5・43〜48)

と。ヒルティはこれを生涯の課題として取り組んだ。私なんか、

「とんでもない。『神さまが完全なように完全になれ』、こんな酷い掟はモーセの律法よりも酷いではないですか」

と言う。キリストはにこにこして、

「私がそうしてあげるから大丈夫だよ」

と。どんなキリストの言葉にも、「私がしてあげるから大丈夫だよ」という裏打ちがあり、これをつかんでなかったら、成らないんですよ。

「私がしてあげるから大丈夫！」

というのが全部、言葉の奥に隠されている。それなのにロシアの小説家トルストイとか真面目な人

はやらなかった。日本の明治時代のキリスト教徒はみんな「山上の垂訓」に躓いた。

「こんな厳しいものにはついていけない」

と。後に白樺派に参加した小説家有島武郎とか有名な文学者にたくさんキリスト教徒がおられたが、厳しすぎてついていけないと言って、みな離れて行った。亀井勝一郎もそうでした。亀井さんは親鸞のところへいった。みんな躓いた。

私を躓きから救ってくれたのが小池辰雄という出来損ないでした。神の前の出来損ない。

「出来損ないだから救われる。だから、出来損ないの奥に光っているキリストを見てくれ」と、小池辰雄は叫んだ。

「天の父の全きことく全くしてやるよ」

という、このキリストの約束。これに委ねていったんです。

ヒルティの場合はそうやって、キリストの言葉に直接にキリストを兄貴や先輩、モデルとして、「キリストに続け！」というわけです。「楽しい42キロのマラソンでございました」というような、そういう走り出しをしようとして、ヒルティは言ってくれた。

人間存在そのものが罪

日本の多くの教会ではどう言いましたか。

「過去の罪はみんな赦してあげる。だから、これからはもう罪を犯さないように。罪を犯

したら、毎日悔い改めなさい」

と。これが、私に通っていた教会の教えでした。過去は赦したが、今後はだめだよ。しかし、小池辰雄はどう言ったか、

「過去・現在・未来のすべての罪、そして存在そのものを根底から全部根こそぎ片付けた。十字架の贖いというものはそういうものだ」

と。もう有り難かったですね、本当に有り難かった。「過去は赦したから、これからは立派にやれ」と言われたら、毎日がしんどくてしょうがないですよ。そして、「世間の人があなただけをクリスチャンとして見てます。あなたが躓けば神さまが嘲られるんです。あなたは証人なんだから、模範生となつて進まなくてはいかん」なんて言われると、もう外に出るのが嫌だった。みんなが私を見ていると思う。しかも、「罪、罪、罪」と言われると、もう窮屈なんですよ。ところが、小池辰雄は、「存在そのものが罪だ。存在そのものが神に逆らっている。あの罪この罪とか、そんなものではない。自分の存在そのものが神さまに反逆している」と言う。そういう烙印を押されてしまったんですね、あのアダムとイブの振る舞い以来。

キリストの振る舞いはいかがか。

「父よ、あなたの御意を」

と。自分がどこかへいってしまっている。そこが神の子なんです。人間でありながら、

「父よ、あなたの御意を。私ではありません」

と、すっかりからっぽになっている。我々はやはり「己」というものがある。「ちょっとは己も認めてよ。私だつてちょっとはいいところがあるんだから」なんて言つて、生活を送っているわけです。つまり、自分を認めてほしい。自分がよくありたい。己を全部否定するのは気の毒なんですけれども。しかし、神さまという絶対の存在は、絶対愛、無条件絶対の愛を貫き、善き者にも悪しき者にも敵のためにも祈る。己というのが自分の中にはない。もし、皆さんがいま言ったようなことを手放して言えたら、神の子ですわ。何も神の子と認められるのに制限はありませんから、何人だつて神の子と認められていいんですよ。皆さん、それで、ぱーつと目覚めたらいい。

「私は神の子です。キリストの言葉を全部、100%実践してます」

と。そう言つて、「100%実践してます」と称える青年が聖書に登場したでしょ。

「私は十誠も律法も全部、小さい時からずうつと守ってきました。でも、心に喜びがない。生命がないんです。永遠の生命を嗣ぐにはどうしたらいいですか？ 善き先生！」

と。このような富める青年の話がありますね。キリストは何と言つたか、

「善き先生」のその『善き』はやめてくれ。善き方は神さまだけだ。自分は何ものでもない」

と。まず、その『善き先生』というその『善き』を除かれた。それから、

「十誠にいろいろ書いてあるよね」

「はい、小さい時からみなやってきました」

「そうか、素晴らしいね。しかし、一つ足りないものがある」

「はい、何でしょうか？」

「あなたは金持ちだね。その富を全部、貧しい人にかけてごらん。身軽になって、すっからかんになって、そして私の弟子となって一緒にいこうよ、これから。そしたら、絶対に天国だから、永遠の生命だからね」

と、キリストは言われた。そうすると彼は悲しそうな顔をして立ち去った。キリストは慈しみの目をもつてそれを見ておられたとあります。私が思うには、彼は絶対あとから救われたと思うんですよ。

「あの時は、立ち去りましたけれども、立ち去ったから、生命がくるわけがありません。あなたに縋^{すが}るしかないんです！」

と言って帰ってきたら、

「そうか、よく気がついた」

「これからどうやって財産を売り払ったらいいですか。どこか競売やってくれるところがありますか？」

「そんなことはいらん。そのままでもいいよ。己を惜しんでいることに気がついていたらいい。誰だって己が惜しい。このことが神さまと自分の間を妨げている。それに気付いたらいい」

「では、どうやったら、除^のけていただけませんか？」

「人にできないことも、神にはできる。神にはどんなこともできるんだ」

と、キリストは言われるはずですよ。ご自分の十字架ですね。これで全部、引き受けられた。

十字架の赦し

ヨハネ福音書に書かれている「姦淫の女」を赦されたのも、みんなそうなんですよ。

「全部、私が引き受けるよ」

と。あのように無条件の赦しを与えていかれたのは、全部、「自分が引き受ける」という、裏打ちがあるからです。事実、本当に十字架の上でそれをなされた。

「父よ、彼らを赦してやってください」

と、敵のために祈られた。キリストこそ全く言葉、行為、祈り、すべてが一つです。全然、ずれがない。我々人間はそうならない。

「心配は要らん。私がそういう人間にあなたを造り変えてあげる。その造り変えるために私は遣わされて来たんだから」

と。この地上でいろんなことを語り、また神さまの業^{わざ}を現した。五千人の人の飢えも一時的にいやしてあげた。でも、空振りだった。永続しなかった。

だから、人間の背きという罪を全部背負って、十字架にかかってくださった。地獄まで行って、地獄で苦しんでいる霊たちを助けて、そして、あの霊体となって顕れてきた。この霊体はもうこの地上の有限な生命ではない。別次元の生命、高次の次元の霊体となって顕れてきた。それから、やがて天に昇られた。そして、聖霊という姿で帰って来られた。

聖霊というお方はキリストの分身だと私は思っています。天界に戻られた霊なるキリスト、霊的

人格キリスト、そのお方の分身です。分霊といつてもいい。ご自身の霊を惜しみなく我々に与えてくださる。五千人の人にパンを食べさせたところではない。五つのパンと二匹の魚。これをキリストは祈られた。祈って神に献げて、

「これは私の体だ」

と言って、裂いて与えられた。男だけで五千人、女性と子供を入れたら一万人、それが食べ飽きて、なお残り屑が十二の籠に満ちたという。そんなことが書かれているでしょ。そしてヨハネ伝では、

「あなた方は、そのパンを食べて満腹したから私の所へ来たのか。そうじゃない。生命のパンだ。あなた方は見えるパンに驚いた。しかし、見えないパン、本当の生命のパン、それは私自身だよ」

ということをおられる。

「私は生命のパンだ。私を本当に食べれば、あなた方は死なない。これが父の御意だよ。」

父の御意は、私の所へ来る者を私が一人も失わないで、終わりの時に甦らせる、これだ」

と。「終わりの時」というのは「今」なんですよ。「今、即刻」なんです。

「私を信ずる者は死んでも死なない。あなたはこれを信ずるか」

と、ラザロの復活のところでもマルタに言われた。キリストにおいてはすべてのことが現在です。それを今もありありとここに現してください、そういう永遠の實在者、愛の霊、愛の権化です。こんな素晴らしい方がこの世の中におりますかという。しかも、お金のかからず只でいただけ、何も

要らん。無条件なんです。

空気のように無条件

皆さん、空気を無意識のうちに何の条件もなしに吸っておられますね。今、「空気」と言って話題にして、初めて気がつかれたのではありませんか。

「あつ、空気を吸っているんだ」

と。寝ている時も吸っています。あのエベレスト山の高地あたりへ行ったら、空気は薄くて、とても息苦しいそうです。でも、この地上では、空気は無条件に吸ってられる。キリストの霊は地上に充滿している。どなたの中にも入りたいと思っておられる。それなのに障壁を作って入れないようにしているんです、人間は。自我という障壁を作って、「入室お断り」と（笑）。私は、

「お入りください。主よ、お入りください！」

と、いつも開けています。聖霊を宿す家主さんです。聖霊は、

「賃料払おうか？」

「いえ、要りません。もうあなたが宿ってくださいだけで、嬉しくてたまりません」

というのが、私の思いですわ。皆さん、どうですか。空気がしみ込んでくるように、そして空気が私たちを生かすように、聖霊が私たちを生かしてください。また、

「私は生命の真清水だ。この井戸から汲む水を飲んでもまた渴く。しかし、私を受けとつ

たならば、渴かない。永遠の生命の水が湧き溢れるよ」

と言われた。みな実際にあることです。警話^{たがひばなし}ではない。本当にこれが実際にあることとして、

「本当にそうですね、主よ、あなたのお言葉は凄いですね」

と、こういう対話をしてください。それには少し雑音を除くためにテレビも消して、キリストと一対一で対話をしてください。

「本当に、主よ、凄いですね。あなたとの対話は愛の巣ですね」

と、キリストの言葉を生命の言葉、愛の言葉として、本当に受けとっていったら、変わってきますよ。私は今日ここに来るにあたって、一期一会^{いちごいちえ}と思つてやって来ました。来年、果して皆さんにお目にかかれるかどうか、誰もわからない。私の命もわからない。皆さんの命もわからない。地上の命とはそんなものですよ。地上の命は、みんな永遠にあるものと思つていますけれども、いつ何が起るかわからない。でも、いつどんなことに会おうと、どんなものに脅^{おびや}かされようと、びくともしない不動なるもの、これをキリストはくださる。これが本当の「人生の補強工事」ではありませぬか。いついかなる時にも、無条件に直ちに応じてくれる。キリストは決して我々の地上の命を50歳まで保証するとは仰らなかつた。キリストご自身、33歳で召されたと言われています。まあ長くてもだいたい、皆さん、120歳までですよ。だから、不老長寿なんて仰らない。

「この地上の命は仮の命だ、仮の世界だ。向こうに本ものがある」

と。しかし、仮の命を大事に、御意^{みこころ}に従つて本当に生き抜いた者だけが向こうに行くに価する。

ヒルティがそのことを言っている。

「この地上の世界からすつと向こうへ行ける。この地上ででたらめなことをやっていた人間は向こうへ行く、死んだとたんに向こうへ行く、そんな不合理なことはありえようはずがない。キリストはあのような素晴らしいお方だから、復活せざるを得なかつた。永遠の生命となつて顕れざるを得なかつた。我々はキリストに導かれて同じような生き方をしたら、すつと行くよ」

と言つてくれた。私はさらに言います、

「聖霊という永遠の生命が皆さんの中に宿れば」

と。この方は「宿りたい、宿りたい」と言つておられる。ただで住まわせる。私たちはキリストに宿を提供する、お宿提供者です。そして、

「キリストが宿つてくだされば、我々の死ぬべき身体をも生かしてください」

とパウロは言いました。そういう現実的なものを約束し、実現してくださいの方がキリストです。

だから、私は叫んでいるんです。単なる哲学の講演とか、観念的な慰めだとか、そんなもののためだったら、私はここへ来ない。いつ何が起ころうと、皆さんと一期一会であろうと、この場が永遠の現在であるということ。今日、皆さんがお聴きになったこと、その他このプリントにまだまだたくさんのお言葉を載せてありますが、これは本当に宝物、生命の宝です。これを皆さんがしっかり受けとつて、子々孫々に伝えてほしい。イスラエルの人たちは、ずっと子々孫々に伝えたくて

すよ、モーセの十誡からいろいろなものを取りそろえて。「律法を首にくくれ、柱に書け」とか言いました。そうやってやはり子々孫々にこの生命の言葉を伝えていってほしいんですね。

日本には日本のやり方があります。ヨーロッパはヨーロッパのやり方でいきなさい。日本には日本の土壌があって、民族性があります。そういう日本の土壌と民族性、この実に豊かな宗教的風土の中に本ものを植えつけて、それが見事な樹木となって根を張っていく。この役目を私たちが負っているんですよ。ここにいらっしやる皆さんお一人お一人がそうなんです。キリストは、

「石ころからでも神の子たちを起こす。この輩、黙せば、石叫ぶべし」

と言いました。だから、決して優等生をキリストは招いておられない。ご縁があつて、こういう講演会においでになった、皆さん一人ひとり原石だ、磨けばダイヤモンドだと。いやもうダイヤモンドの方もたくさんいらっしやるけれども。そういうダイヤモンドもしくはダイヤモンド候補生がここにそろつておられるわけです。それが本当の人間の尊厳だと私は思っています。

「祈るときには」

マタイ福音書6章に「祈るときには」というところがあります。

「……あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。』¹⁰御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。

「わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください。い、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。』」¹¹私たちは、

「これが足りません、あれが足りません。こうしてください、ああしてください」

と、ごちやごちやとたくさん悩みや願い事を持つているんです。神さまの方は、

「みんな、知っている。みんな、知っているよ」

「そんな、知っているんだったら、なぜ、祈るんですか？」

「会話したいじゃないの」

と。こういうわけです(笑)。夫婦でもそうですよ。

「あなたの言いたいことは、みなわかっているよ」

と。だから黙っているのではない。むっつり夫婦だったら、気まずいですよね。子供の場合だってそうですよ。わかっていることをお互いに確認し合いながらコミュニケーションできるといのが、私と孫との間柄なんです。

こういう言葉もキリストが我々に直接、語ってくださいている。いやもう、キリストが我々に言葉をかけてくれるというだけでも感激です。皆さん、天皇陛下からお言葉をかけられたことがありますか？ まずないでしょうね。やっぱり、嬉しいし、感激しますよね。まあそれと似たようなものなんです。キリストから直接、言葉をかけてもらったら、どんなに嬉しいか。皆さんに毎日毎日、

キリストは語ってくださっているんです。本当に語りかけて、肩に手をおきながら、
「大丈夫だよ、大丈夫だよ」

と。私は先程述べた「心の貧しい人は……」以下のプリントしてある所を、昨日もホテルですつと読んでいたけれども、読んでいるうちに涙が出てきますね、ありがたくて。「ああ、こんなふうに語りかけてくださっているんだ」と。「今」現在なんですよ。「昔、昔、主はかく言い給えり」ではない。論語だったら、「子曰く……」だけれども(笑)。今現在、あなたに向かつて、このように語りかけている。キリストがそばに居てくださる。そういう思いで受けとってほしいんですね。この中で、

「わたしたちに必要な糧^{かて}を今日与えてください。」
と言いながら、「赦し」のことがたくさん出てきている。いかに人間は人を赦すことが難しいかというのをキリストはご存知なんですよ。

「敵のために祈れ。迫害する者のために祈れ」
この言葉もそうでしたね。

「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」

と。「赦しましたように」というのが先に出るんですよ。「赦したから、私の負い目も赦してね」とこうくる。だから、赦していなかったら、願えないです。これは法学の用語では、「同時履行の抗弁権」とかいって、要するに「引換給」でいきましょうということ。あなたが払ってないから、

私も払わないよ」というのが法律の世界、経済の世界のルールなんです。ところが、神さまの方は、

「¹⁴もし、人の過^{あやま}ちを赦すなら、あなた方の天の父も過ちをお赦しになる。¹⁵しかし、赦さないなら父もあなた方の過ちをお赦しにならない。」(マタイ6・8〜15)

と。さらにだめ押しをしておられる。これはきついですよね。どうしたらいいですか。

「赦せません、助けてください!」

と願うことなんです。「こうしなさい」と言われて、できなければ、ふいと横を向くのではなくて、
「できません。お助けください。赦せるような心をください!」

「そうだよな、赦しなんてできないよな。憎たらしいあいつの顔を思い浮かべるだけでも嫌なものな」

と(笑)。そうでしょ、人間というのは。でも、それを乗り越えて、

「私の所へ来てごらん。私と一つになってごらん。私から赦しの心が流れていくから。私の霊は赦しの霊、愛の霊だから」

「はっ、そうですか。そうなんですな」

「そうだよ」

と。人にできないことを神がなさる。人ができるなら神さまは要らん。そうでしょ。

私はあのラザロの復活のところでも思うんですよ。ラザロは墓に葬られて四日も経^たっていたでしょ。キリストは何と言われたか。

「石を除けなさい」

と言われた。石を除けるというのは、力もちで除けられますよ。それから、

「ラザロよ、出てこい!」

と。この「ラザロよ、出てこい」はキリストしか言えない。石を除けるのは我々人間でもできるんです、協力すれば。だから、私は自分の信仰生活を振り返り、どこまでが自分で石を除けることか、即ち自分でやるべきことなのか、どこからがキリストの出番なのか。そのことをやはり思います。コーヒー飲んだりお茶を飲むのにいちいち、「神さま、こうしてください」なんて(笑)、そんなことを言う必要はないでしょ。でも、どうしても自力でできないことに出会ったら、たじろがないで、「あつ、これはできない。ここから、主よ、あなたの出番です。助けてください」

と。子供だってそうですよね。

「やれることはやってごらん。それでやれないことは、おじいちゃんがついているから大丈夫だよ」

と、こういうわけです。そういうふうに私は思っています。ですから、

「赦しは難しい。でも、主よ、あなたの霊が私のうちに宿れば、いつしか私もあなたと同じように赦せる人間になると信じております。だから、さしあたり、仮出獄させてください」というわけです。

「天に富を積みなさい」

次に、「天に富を積みなさい」、これもなかなか大変なんですね。

「¹⁹あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。」

確かに地上は宝を置くのにちょっと不便な所ですね。銀行に預ければ、銀行がつぶれるし(笑)、証券を買えば、証券がだめになるしね。キリストは、

「だから、天に宝を貯えなさいと言ったのだろ」

と、今ごろにこにこしておられますよ。「天に積む宝」とは何ですか? お金は天に積みません。我々の愛の行いです。愛の行為。神さまは自分のためには何も求めておられない。

「神の心をもって人に仕えなさい。人を助けなさい」

と。神さまは貧乏ではないですから、神はくださる方ですよ。くださる方ですから、豊かな生命をいただき、豊かな力をいただき——力がなければ人助けもできない——力をいただいて、それでも人に仕えなさいと。これは御意みごころですから。人に仕える姿にはいろんな姿があり、ながらも現実の行いではなくても祈りだっている。誰かのために一生懸命に祈るという、それだっている。とにかく、神さまが喜んでくださるような在り方、これが「天に宝を積む」という姿だと私は思っています。

²⁰富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、
²¹盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。²²あなたの富のあるところに、あなたの

心もあるのだ。」(マタイ6・19〜21)

「あなたの宝のあるところに心もある」という。皆さんの心はどこにありますか、宝は何ですか。「天の宝」というところに目を向ける人は幸いですと思います。

「体のともし火は目」

次に、「体のともし火は目」。

²²「体のともし火は目である。目が澄んでいけば、あなたの全身が明るい、²³濁っていけば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどである。」

「あなたのうちなる光が消えていけば、あなたは実は暗いんだよ」と。「中なる光」とは聖霊なんです。キリストの霊です。「あなた方は世の光である。なんとすれば、私があなたの中に宿って光るから、^{ほたる}螢を^{うらや}羨ましがらなくてもいいよ。あなた自身が発光体だよ」と言われた。キリストという霊がうちに宿ってくださると、光を放つ。灯火になる。

²⁴「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

それから、「思い悩むな」という。

²⁵「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の^{からだ}体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。²⁶空の鳥をよく見なさい。種も^ま時かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。

羨ましいですね、「働かんでいい」と言う。キリストは怠け者を奨励しているんでしようかと(笑)。

種も時かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。²⁷あなたがたのうちだが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

²⁸なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、^{むら}紡ぎもしない。²⁹しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。³⁰今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように^{かそ}装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。」(マタイ6・22〜30)

野の草は枯れば火に投げ入れられて焼かれます。でも、このように素晴らしく咲いているのは、太陽の光、空気、水、そういった自然の恵みをいっぱい受けて、咲いているわけですね。自分ひとりで咲いていません。恵みの中で咲いています。

「あなた方はこれよりもっと素晴らしいよ」

と、キリストは言うてくださった。要するに、ここでキリストが言うておられることは、自然を見てごらんと。「自ずと然り」ではないですか、「自然」というのは。自ずと然りの姿で、それぞれの様である。そしてちゃんと神は守って栄えさせてくださったている。

「あなた方はもつともつと素晴らしい存在なんだ。神の生命を受けるに相応しい人たちなんだよ。それが思い悩んで、うつむいていたら、どうするんだ。胸を張って、天を仰いで行こうではないか。身体のこと、生命のこと、神さまがちゃんと必要なものはご存知なんだから。必要なものはすべて祈る前からご存知だ」

と。祈る前からご存知だ。だから本当に必要なものは、「必要なんです、ください！」と言えど、どういいう経路で来るか知りませんよ——でも、備えられるよと。キリストが約束されたことは必ず成就します。

今は世界の経済が大変でしょ、チャンスですね。もう一度、キリストの言葉に帰ろうよと。マネーゲームで何か変なことになるってしまつた。その罪は誰が背負うのか知りませんけれども。もう一度、原点に帰って、キリストの言葉に皆が立ち向かつて考えよう。

「神と富とに兼ね仕えることはできな」

と、キリストは言われたのに、世界の人々は富にばかり仕えてきた。その刈り取る実は、今の経済の状況ではないかな。私は経済のことはわからない人間だから、こんな勝手なことを言うけれども。経済の専門家だったら、それなりに言い分があるのだろうと思います。

やはり、原点は何かというと、素朴に神を信頼し、自然を大切に、そしてお互いに助け合い、相通じあつて生活していくということではないでしょうか。何かが必要であつたら、森林を伐採して耕地を広げ、大豆を植えてみたり、やたらと森林伐採して金に換えてみたりとか、人間は地球を壊しまくつてきた。そう思いますね。あるいは放射能がこちらにばらまかれたり、全部、人のなせるわざです。「同じ人間の行つたことなんですか？」と言いたくなりますね。全部、人間の仕業なんですよ。人間がやってきたことなんですか？と。ところが、神さまへは帰ろうとしない。政治家は適当に宗教を利用します。それが選挙に有利だと思つたら、宗教を利用するように私には映ります。本気で命懸けで神の国のことを思って、政治をやってくれたらいいんだけど、それは無理なのかも知れませんが。

けれども、キリストがここで取り上げたように語つてくださっている言葉に、皆さん、立ち返つてほしいと私は願っています。

「だから、『何を食べようか』『何を飲むつか』『何を着ようか』と語つて、思い悩むな。」

³²それはみな、異邦人が切に求めているものだ。

「異邦人」というのは「神さまを知らない人たち」と受けとつてください。本当に神さまのことが知らない人たち。私なんか異邦人だったわけです。実際、「何を食べようか、何を飲むつか」という将来のことで思い悩んでおりました。将来の自分の生活、家族の生活、それらを全部、自分で背負い込むような気持ちでございました。ところが、「キリストの所に来たら、あなた方は何も心配いらん

よ」という。

あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。

³³何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。³⁴だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」(マタイ6・31〜34)

「明日のことを思い煩うな。一日の苦労は一日で十分だ」と。この言葉は有り難いですよ。みんな、明日のこと、明後日のこと、将来のことを一生懸命に考えて、悩むんですね。それでそのための保険制度とかいرونなのがあるんだけど。それは人間の社会制度としては必要なのでしょう。けれども、基本的には、

「一日、今日一日を、主よ、あなたの守りの中に、導きの中にお守りください」

という、そういう気持ちで一日一日を生きていくという、その積み重ねが大事ではないでしょうか。

「求めなさい」

次は「求めなさい」ということ。7章です。

⁷「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」

「何でも求めたらいい」と言うんです。「本当にこれは絶対に欲しい」と思ったら、

「求めなさい、そしたら与えられる。探しなさい、そしたら見つかる」というのがキリストの約束ですよ。

⁸だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。¹⁰魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。

「石」というのは軽石のようなもので、パンと似ていたようですね。それから、蛇とか蠍さそりというのが、長い魚やエビと似ていたようです。似て非なるものです。似たものを与えて誤魔化したりはしない。

¹¹このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。

と。ぐざりときませんか? 「あなた方は悪い者である」という。そうです。「こんな悪者でもなあ、子供にはちゃんとやってやっているんや! 子供には、違うことをしているんだよ」と言うのが人間性です。この頃はなかなかさうではなくなってきましたけれども(笑)。本当はそうなんです。自分ばかりじゃなくて、子供にはちゃんとやりたい。

まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。」(マタ

イ7・7〜11)

「ましてや、あなた方は神さまの愛する子供ではないか。神さまが放っておくはずがないよ。だから、信頼しなさい」という。

「狭い門」

次に、「狭い門」。

「¹³狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。¹⁴しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを

見いだす者は少ない。」(マタイ7:13-14)
 それでは、いったい誰が救われるのでしょうか。「みんなで渡れば恐くない」と言っ
 て、赤信号を渡るといのは困りますよ。「みんなで渡れば恐くない。一人ではなかなかやれません」と言う
 だけでも、ここでは、

「命に通じる門はなんと狭く細いことか。見いだす者は少ない」

と。では、どういう人が命に通じる門を見いだすのだろうか。先程述べた「山上の垂訓」の
 と同じです。自分は惨めだと自覚する人、自分がこのままではどうにもならないというふう
 に自分の欠乏を自覚する人。絶望とまでは言いませんけれども、差し迫っていると感
 じている人。そういう人が福音に近いんですね。

「私のもとに来なさい」

次の言葉を見てください。「私のもとに来なさい」という、11章です。

「²⁵そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。

これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、²⁶幼子わかちのような者にお示しになりま
 した。²⁷そうです、父よ、これは御心に適かなうことでした。²⁸すべてのことは、父からわた
 しに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思
 う者のほかに、父を知る者はいません。²⁹疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわた
 しのもとに来なさい。休ませてあげよう。」

この言葉ですよ。

²⁹わたしは柔和で謙遜な者だから、

からっぽだから、神の前に平伏ひれしだから、

わたしの軛くびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。

³⁰わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:25-30)

これは慰めに満ちた言葉ですよ、本当に。へばった時に、もうだめだと思
 う時に、

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにいらつしやい」

と、この言葉に出会ったら、本当に砂漠でオアシスにたどり着いたという思いが
 します。

「最も重要な掟は何ですか」

次にマルコ福音書のところ、「最も重要な掟は何ですか」という問答です。12章です。

「²⁸彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになつた

のを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」²⁹ イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』³¹ 第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

キリストという方はこのとおりのことをなさいました。全存在で神に従いきられた。「神を愛する」ということは御言に従うということ。その御思いのとおりに生きることが「愛する」ということです。

³² 律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。³³ そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」³⁴ イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。(マルコ12・28-34)

「そのとおりだ、あなたは神の国に近いよ」と。ここまでは、いわゆる共観福音書の中の代表としてのマタイ福音書からのキリストの言葉を引いてきました。

「永遠の生命」

次は、ヨハネ福音書の第二楽章にいきます。ここでは「永遠の生命」をずばり語ってくれています。

日本人にとって非常に親しみやすい。私はそう思います。

「神は審きの神である。恐い神である」

という観念は一掃されます。

「神は慈しみの神である、愛の神である、己を与えてやまない神である」

という、愛というのは与える愛です。ご自身を与えてやまない。それが父の御意なんです。これをしっかり受けとっていただきたい。3章です。

「¹⁶ 神は、その独り子をお与えになつたほかに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷ 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。¹⁸ 御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。¹⁹ 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになつている。²⁰ 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。²¹ しかし、真理を行う者は光の方に來る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」(ヨハネ3・16-21)

神さまは裁こうとなさっていない。「光が来た、これが救いだよ」と言つて、やって来たのに、それを「要りません!」と言つて、衝立を立てて拒絶している。それではどうしようもないではない

ですかと、こういう単純な話です。その次、5章にいきます。

「そこで、イエスは彼らに言われた。」「はっきり言っておく。子は、父のなさることを見なければ、自らは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。」

「自分は何もできないよ。父のなさることを見なければ、自らは何事もできない。父がなさることは何でもそのとおりする。ちゃんとお示しくださるから」と言っておられる。

²⁰父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。²¹

すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。

我々が一番欲しいものは永遠の生命、これを与える。

²²また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。

裁きは自分が引きとってください。

²³すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない

者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。

これが大事なんですね。「神さま、神さま」と言って、キリストをそっちのけにしたらいけない。まずキリストを通して、父なる神さまのところへ行く。

「我は道なり、真理なり、生命なり。私を通らなければ、父には行けない」

とキリストは仰った。私はそれが有り難い。キリストの中へ抱きとられれば、その向こうに父がいてくださる。父なる神はキリストを抱きとっておられる。そのキリストが門を開いてくだされば、そこへ飛び込んでいけば、そこにちゃんと父も一緒にいてくださる。

「私を見た者は父を見たんだ。父と私は一つだよ」

と言われた。キリストを二の次にはいけません。教会の祈りも、私はそうあるべきだと思っんです。「天にまします我らの父よ……」と、父なる神のことを祈って、最後に「イエス・キリストの御名によって」と、イエス・キリストの御名がちよこんと出てくるんですよ。私は、これも小池辰雄先生から教わったんです。

「主イエス・キリストさま、主さまー!」

と祈る。イエスは「父よ」と直接呼ばれた。イエスは父の懐へ飛び込んでいかれた。神さまの前にキリストが立ちはだかつて——邪魔するのではなくて——私たちに門を開いて、

「さあおいで!」

と言ってください。だから、

「主よ、主さま、主キリストさまー!」

と。「主キリストさま」と祈れば、背後にいる父は、「うむ、うむ、聞いてるぞ」という、そういう感じなんです。親しみやすい、「主キリストさま」というのは。先程述べた讚美歌に、「いつく

しみ深き友なるイエスよ」とあつたでしょ。イエス・キリストの背後に父なる神がいてくださる。そういう関係でありますので、「イエス・キリストの御名によって」と、最後に御名がほんのちよつと出てくるのは、私はあまりしつくりこないんです。

²⁴はつきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じ、る者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。死から命へと移っているんです、もう既に。

²⁵はつきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。

皆さんはどうですか？ 私はキリストに出会うまで死んだ者でした。自分の中に生命があると自覚しなかったですよ。

「私は死に至る人間だ。どんなにこの世でいろいろ幸せなことがあっても、結局、自分は死んでいく人間だ。また愛する者もいつか死んでいく。いや、いつかどころか、明日にも死ぬかも知れない。人間はそういう儂い存在だ」

と。そしたら、喜べなかった。何があっても本当に心から喜べなかった。ところが、世間の人はみんなにここに、にこにここと楽しそうに過ごしておられるので、私は「不思議だなあ。これは私が病気ではなからうか？」と思った。精神科へ行ったら、「病気じゃありませんよ、あなたは真面目すぎるんですよ、もう少しおおらかになりなさい」と言われた。真面目に考えたら、そうでしょ。ところが、キリストは、

「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる」

とおっしゃった。私はキリストの御声によって生きたくんです。同じ肉体の持ち主でありながら、同じ自然な生命の持ち主でありながら、キリストの霊とキリストの生命が宿った。具体的には聖霊という姿で宿ってくださるんです、初めはよくわからなかったけれども。とにかく、キリストというお方に触れたことによって、私は生きた。生きていくという実感が湧いてきた。でも、その「生きた」という実感はあっても、これからどうやって本当に神の子らしい、キリスト信者らしい、褒めていただけるような本当のクリスチャンになれるのか、それが心配でした。いろんなことがありましたよ。けれどもとにかく、死というものの恐怖は消えた。本当にそうですよ。

ですから、ヨハネ伝は、これから先の話、何千年も墓に眠っていたものが不意に眠りから甦るといふ話ではない。今現在のことですよ。すべては今です。永遠の現在ですよ。死んだような私が御子キリストの御声に触れて生きましたと。今、生きています。

²⁶父は、御自身の内に命を持っておられるように、子(イエス・キリスト)にも自分の内に命を持つようにしてくださいましたからである。

「その生命を与えよう」と言っておられる。

²⁷また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。²⁸驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、

ご自分のことを「人の子」と仰っている。私の声を聞き、

²⁹善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。

またこんな時も来るんでしょうね。とにかく、我々は「今、現在」です。

³⁰わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」(ヨハネ5・19～30)

「裁き」というのは、「判断」という意味でもある。「白か、黒か」と、裁きをする、判断するということ。判断を誤らないために——裁判官の方々はいつも苦勞なさっています。裁判員になれば、皆さんも苦勞なさいます——判断を誤らないためには、まず己から私的な感情がなくならないといけない。だから、自分に関わりの深い事案の場合、裁判から外されるでしょ。利害関係のあるものは外されます。それもそうなんです。でも、万般、学問においても、裁判においても、どんなことにおいても、正しい判断を行うには、自分というものから外れていないといけない。御意だけを求めて、「あなたの判断で判断させてください」と。私は学問する時にも、

「主よ、あなたの澄みとおった目で物事を見させてください」

と。そういう祈りで取り組んできました。キリスト信者になってからは、大したことは何もしてないけれども、それだけの一念でやってきました。

「物事を正しく見させてください。正しい判断を与えてください」

と、それだけでしたね。裁判官になってからでもそうでした。

「イエスは命のパン」

次に、6章にいきます。五千人の人たちを五つのパンと二匹の魚で養われた。その後の出来事です。「イエスは命のパン」のところです。

「²²その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、……³⁴そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言つと、³⁵イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。³⁶しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。³⁷父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのもとに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない(拒まない)。³⁸わたしが天から降^{くだ}って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。³⁹わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を」

私の所へ救いを求めて来る人、生命を求めて来る人、そういう人を、

一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。

この「終わりの日」というのは「今」ですから。

40 わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」(ヨハネ6・22～40)
この点はヒルティも、

「この終わりの日は遠い日ではなくて、今だ」ということをはっきり言っています。

「現世においてこの復活の生命、キリストが賜られたと同じ復活の生命にあずかっていないと、どうして向こうの世界へ行けるんですか」

と、それははっきり言ってますね。それから次の10章25節にいけます。

「25 イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。26 しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。27 わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。28 わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。29 わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。30 わたしと父とは一つである。」(ヨハネ10・25～30)

先程取り上げた讚美歌で「牧主わが主よ」と歌いました。それはこの10章を歌っています。

それから、「ラザロの復活」のことが出ています。11章です。

「25 イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ11・25～26)

と言われた。「はい、そのとおりです!」と、もう今だったら、皆さん、お答えになれますよね、「はい、そのとおりです」と。

「新しい掟」

それから、13章にいけます。今度は「新しい掟」。さっき、

「心を尽くし、精神を尽くして神を愛すること、己の如く隣人を愛すること、これが旧約における最大の誡命だ」

ということをキリストは言われたけれども、キリストがこの世を去られるにあたって、

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。これが私の与える新しい掟である。ただ一つの掟である」

ということを言われた。

「34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」(ヨハネ13・34)

35)

見えない神さま、見えないキリストを誰が表すのか？ キリスチャンです、キリストの弟子どもです。キリストの弟子どもの姿がキリストと同じような愛の姿であるならば——人に尽くし兄弟姉妹、信者同志互いに愛し合っている——その姿に天国が現れている。それで初めて、「天国が近い」ということが皆さんにわかっていただけるわけですよ。

「イエスは父に至る道」

その次に14章。ここは聖霊のことを言っておられる。

「今から天国に場所を用意して、用意ができたらまた帰ってくるからね」

と、そういうことを言われて、「どこへ行くのかわかっているだろ」と。それに対して、

「トマスが言った。『主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちにはわかりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。』」

それに対して有名な言葉、

「イエスは言われた。『わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。』あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。』」

「もう知っているだろ」と言われた。「いえいえ、とんでもない。わかりません。父を示してください!」と、今度はフィリポが言い出した。

「フィリポが『主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます』と言うと、イエスは言われた。『フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、』わたしたちに御父をお示してください』と、言っているのか。』

「一緒に長いこといてまだわからないの? 私を見た者は父を見たんだよ。何を見てたの!?!」というふうに言われた。聖霊が来なければわからないそうです。聖霊がキリストをお示しくくださる。だから、これは無理もないんですよ、弟子どもは。聖霊がまだ来てませんから。生まれながらの自然な人間の目では見えない。そこで、「私を見た者は父を見たのだ」と仰って、

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言っている言葉は、自ら話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。』わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言っているの信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。』はっきりに言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。』わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって

栄光をお受けになる。¹⁴わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」(ヨハネ14・5〜14)

そういう約束まで弟子にしておられる。約束は弟子どもにしておられるから、自分には関係ないと思わないでください。我々は弟子なんですから。我々はみんな弟子ですよ。「弟子の試験はあるんですか？」なんて。いやもう、押しかけ弟子ですよ(笑)。自分で弟子入りしたんです。

「聖霊を与える約束」

次が、「聖霊を与える約束」。このことは絶対、皆さん、受けとつていただきたい。

¹⁵「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟おきてを守る。」

「愛する」ということは、「言葉を守る」ということです。その人が最も大事にしている言葉を大事にするということが、その人を愛するということですよ。そのことを言っていらいらっしゃる。

¹⁶わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。

「弁護者」という訳語は嫌いですね、昔の文語訳聖書には「助主たすけぬし」と書いてある。助け主、私はそのほうが好きです、弁護士の先生には申し訳ないけれども。この言葉は「パラクレートス」といって原語的には「弁護者」という意味だそうです。要するに、守つて助けてくださる方かた。これを遣わして、永遠にあなたがたと一緒に居らせてくださるんだと。しかも、

¹⁷この方は真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。本当は知らないですけれども、知っているはずだよと。

この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内うちにいるからである。

「あなた方の内に宿りたもうお方だからである」と、先取りして言っておられる。

¹⁸わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻つて来る。

聖霊という姿で帰ってくる。そうしたらもう、永久に永遠にいつも一緒だよと。父なる神さまと私とあなたたちの中にいる聖霊といつも一緒。「三位一体」といいますね。「父・御子・御霊」それから我々人間の四者は四位よんみ一体なんです。これが本当の生命の世界、本当の救いだよと言う。

¹⁹しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。²⁰かの日には、わたしが父の内うちにおり、あなたがたがわたしの内うちにおり、わたしもあなたがたの内うちにすることが、あなたがたにわかる。

その他いろいろ言っておられますが、要するに、「私を愛する人は私の言葉を守る」ということが大事です。²³節、繰り返します。

²³イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたし

の父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。²⁴わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。……²⁶しかし、弁護士、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。

聖霊という助主^{たすけぬし}、真理の御霊^{みたま}が来たならば、あなた方にすべてのことを教えてくださる。今までいろんなことを語ってきた、それを全部思い起こさせてくださる。しかも、心に平安が宿るから、恐れがなくなる。平安が宿る。その平安というのはこの世のものではないと。

²⁷わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」(ヨハネ14・15〜27)

それから15章は、「葡萄の木と枝」というところです。

「私は葡萄の木、父は農夫。私のこの葡萄の木にしっかり繋がっていたら、くらいついでいたら、絶対に実を結ぶから。枝は本体から離れたら、何もできないよ」
と、そういうことを言われた。そして、

「私の中にある喜びがあなた方の中に充滿するように」
と言う。

¹⁰わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの

掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。¹¹これらのことを話したのは、

わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。

¹²わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」(ヨハネ15・10〜12)

と、言ってくださっています。駆け足でしたけれどもヨハネ福音書のことはいままでとします。

パウロのローマ書

では、最後の第三楽章にあたるパウロのところにいけます。パウロはとても理屈っぽい人で、イエス・キリストの救いの実体を神学的に語ってくれました。しかし、パウロの言おうとすることは、我々日本人には簡単なことです。パウロはユダヤ人を相手にして神学を展開していますので、大変なんです。「律法と福音との関係」を述べることになりすから。我々日本人には「律法」というのはあまり関係がありません。

むしろ、我々日本人の過去の宗教風土との関わりが重要です。さつきから申しましたように、日本には八百万の神々^{やおよびのミコ}がおり、また様々な宗教的、道徳的風土がありました。そうした風土の中で我々は育まれた。そういう我々日本人がずっと育てられてきた風土というものと、キリストの福音、これとはどういう関わりを持つか。そういう角度で捉えていただければいいんです。

一言で言いますと、パウロがローマ書の中で「肉」と言っているのは、自己中心の在り方のことで、

人間の生まれながらの在り方、自己中心の在り方、これを「肉」と言っている。他方、「霊」というのは何かというと、神中心の在り方、キリストの生き方です。キリストの在り方、これを「霊」と言っています。

パウロは、せっかくユダヤ人がモーセを通して、あの尊い律法を賜ったのに、人間の根性が曲がっているために、尊い律法をねじ曲げて、己が肉の思いで神の前に義であろうとした。己を高しとし、己によって栄冠を勝ち取ろうとした。このことが実は間違っていた。そうではなくて、別の道がキリストによって示されたのである。これは「福音の道」、信ずる者すべてに与え給う神の義である。

「別の道が備えられた」

ということユダヤ人に言ったんです。

我々からすれば、先祖伝来の宗教風土があった。それはそれで尊いんだけど、そこへもう一つ別の本体がやってきた。いわば我々日本人にとつての旧約時代と新約時代との関係みたいなものです。いろんな宗教風土の中に最後の本命がやってきた。これがイエス・キリストの救いです。イエス・キリストの救いはどの民族にも、おおよそ人が人であるかぎり、普遍的である。非常に個性的でありながら、普遍的である。だから、民族それぞれにそれぞれの受けとり方をしてよろしい。ちょうど、太陽が一つの地球を照らしているのに、地球にはいろんな民族がいるように、神さまの啓示もいろんな民族にいろんな形で現れた。その集大成としてキリストという方がいてくださる。私にはそう思われるんです。霊界の太陽として、キリストはいてくださる。この太陽は平和なお方です。

自ら武器を取らない。敵のために祈る方、自分を犠牲にして与えてくださる方です。しかも、それは神の御意であつた。パウロは言うんですね、

「神の義はキリストの福音のうちに現れた。そして、信仰から信仰へと進ませる。キリストが十字架で死なれたことにおいて神の愛が現れた。神の愛は十字架に極まった」

と言う。自分の愛する独子（ひとりご）を十字架につけて惨殺しなければならぬ。神さまが惨殺したのではない。人間が惨殺するのにお委ねになった。その厳しい運命、使命というものをキリストは敢然とお受けになった。十字架にかかる前夜のゲッセマネの祈りを通して。ゲッセマネの祈りでも苦しんで祈られた。でも、敢然と立ち上がって十字架にかかることを受けとられた。見事に人類の罪の贖いというものを果たされた。だから、過去・現在・未来の全存在を、全人類を、しかも、個人の過去も現在も将来もすべて救い上げてくださった。そういう偉大なる霊、これがキリストの霊なんですよ。

神も凄い霊でしょ。全宇宙をお創りになって、その安定を保っておられる凄い霊ですね。その宇宙的な神の霊を100%受けて、その神の御意のままに歩んで、全人類の罪の贖いという誰もできないことをキリストはやってくださった。

ちなみに、お釈迦さんはやってくれなかった。素晴らしいお方ですよ、お釈迦さんは慈悲深いですからね。自分の本願の祈りで救いあげたい、衆生を救いたいと思つた。それはそれで素晴らしいと思うんですけども。キリストは自ら十字架にかかる犠牲を通して、具体性をもって示された。だから、ローマ書8章のところに、

「だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。」(ロマ8・33)

と。反対する者は、

「あの者はまだ罪びとです。この者はまだこんな悪いところがあります」と訴える。キリストは敢然とその前に立ちほだかって、

「私の十字架の贖いはそんなに無力なのか！」と叫んでおられる。

「私の十字架に足りないところがあるのか！」

という、この叫び。これを、皆さん、是非とも受けとってほしいんです。「自分の罪がどうだこうだなんて、もうそんなことはぶっ飛んでいるんですよ。もう問題ない。問題だらけの人間を「問題ない」という絶対的な世界にキリストは引き上げてくれた。

人間社会の基準は相対的です。すべて条件付きです。「あだからこうだ」と、全部条件付けられているんです。「あいつはこういう人だから、私は好きなんや。こいつはこんな人だから、嫌いなんや」とか。ま、それはそれなりに意味があるんですよ。でも、そういう相対的な価値判断、相対的な価値評価、相対的な命の世界に対して、絶対なるものが現れた。しかも煎じ詰めていえば、その絶対なるものは愛そのものであった。その愛を十字架にかかり全人類の罪を贖うという姿で示された。

「どういう神の御意か私にはわかりません。なぜ、イスラエルの民に示されたのか。なぜ、イエスというお方において示されることになったのか。この私にはわかりませんが、具体的にイエス・キリストが十字架にかかってくださったことを通して、私たちの全存在を未来永劫に贖い取ってしまつた。このことをローマ書8章において叫んでいるんです。

「罪と死の法を、生命の御霊の法が解放した。キリストによって。だから、もはやあなたは罪に定められることはない。絶対に安心だ。しかも、素晴らしい栄光の姿に我々は変貌させられる。この神の愛から我々を引き離すものは誰もいない。」

と、そのことを絶叫しているのがローマ書8章なんです。「自由」についても書いておきましたが、もう皆さんと一緒に読む時間がありません。我々は単刀直人にキリストを受けとり、キリストに委ねる。それだけです。妨げるものは何もありません。台風一過、実に清らかな空気が流れている。

「幸いなるかな、心の清き者、その人は神を見る」

と言われた。聖霊をお受けになったら、神さまが見えてくるんです。キリストにおいては神さまが見えているんですよ、皆さん。だから、我々人間の、「できない、できない、できない」の咄き、嘆きをキリストは、

「できる、できる、できる。あなたはできるんだよ、あなたは生命だよ」

と、全部、否定的な気持ちを積極的な前向きな気持ちに引っくり返してくれる。

「あなたは死なないよ、あなたは神の子だよ」

と。その大逆転をキリストは十字架にかかってくたさるることによって成し遂げた。どの教会にも十字架が立っています。皆さんの身体の中にも十字架を立ててください。この力は凄いですから。

「十字架という言葉は、滅びゆく者には愚かであるけれども、救われる我らには神の力なり」(コリント一・18)

と、コリント前書にあります。十字架という言葉、十字架が叫んでいる言葉、これを我々は日本人らしく受けとっていく。東洋的感覚で。そのことを私は皆さんに訴えたいんです。

もう時間がきましたので、これで終わることにいたします。

祈り

では、お祈りいたします。主イエス・キリストさま、この永遠のひと時を与えてくださってありがとうございます。この空間をあなたはこの地上から切り取って、天の空間としてくださいました。あなたがここに臨在くださって、お一人お一人に私を通して、お一人お一人の魂に深く語りかけ、入りこみ、また抱いてくださいました。ありがとうございます。

どうぞ今日、お聴きになったことを本当のあなたからの言葉として——私はただ管にすぎません——あなたご自身の生命の言葉としてお受けいただいて、誰でも無条件に空気を吸っているように、「私を吸うんだよ、私を食べるんだよ、私の生命を飲むんだよ」

と、そう仰ってくださいているあなたさまを単純に、本当にシンプルに受けとって、単純で健やかな日々をお過ごしくださるように。そして日本を救っていただきますように。この人々が本当にこの世の塩となり光となり宝となって、この国を救い上げるような祈りに導いてくださいますように、^{こいねが}希^{いねが}いたてまつります。

一切を感謝して、主イエス・キリストの御名^みにあつてこの祈りを御前^みにお献げいたします。アーメン。